

フジ、ケヤキ、ツタにアケビにイロハモミジ——。十九世紀に出島に商館医としてやってきたシーボルトがオランダに帰国する際に日本から持ち帰った植物は約五〇〇種と言われています。そのうちおよそ半分が長い航海でしおれ、かの地にたどりついたのは二六〇種。二〇〇〇年の日蘭修好四〇〇周年を機に、オランダ・ライデン国立民族学博物館で大切に育てられていたこれら日本の植物の中から五種類が里帰りすることになり、史跡として整備された出島と、ライデン大学と友好関係にある長崎大学に分けて植えられました。今も文教キャンパスの薬用植物園には、これらの植物がいきいきと葉を茂らせています。薬学部の中田隆准教授にお尋ねしました。

「薬草は治療に欠かせないものであったので、当時の医師は植物にも精通していました。特に博物学の素養もあったシーボルトは、かなり精力的に日本の植物を集めたようです。鳴滝塾の優秀な門人たちにも、医学の情報を教える代わりにオランダ語で植物のレポートを提出させました。まさにギブ&テイクです。しかし、シーボルトの目から見ると珍しい植物も、我々日本人には見

慣れたもののが面白いですね。逆にユリやアジサイは、彼が持ち帰ってオランダで品種改良を重ね、今の姿になりました」

園の中を歩いてみましょう。ここには四五七種類の薬用植物が所狭しと植えられ、その中を散歩する市民の姿も見られます。植物園の管理をしている山田耕史准教授によれば、一般の方にもなじみやすいよう、入り口付近にはハーブなど身近な植物を植栽し、奥に行くほど珍しいものという配置にしているんだそうです。おや？ 片隅に奇妙な煉瓦塀。山田先生、これ、なん

「ああ、ツタを這わせるために造った塀ですね。このツタも実はシーボルトが日本からオランダにもたらしたのなんですよ。つまりシーボルト以前にはオランダにはツタは存在せず、彼が日本から持ち帰って広まったのです」

なんと！ ツタの絡まる煉瓦の建物といえば欧米の建物のシンボルというイメージなのに、意外でした。ちょうどこれからは里帰りしたイロハモミジが色づく季節。時を超え、海を越えて行き交う植物たちに会いに足を運んでみるのもいいですね。

「もの」には物語があります。大切にしてきた人々の思いがあります。このコーナーでは、長崎大学のキャンパスに眠るお宝や芸術作品をクローズアップ。その背景を知り、好奇心をくすぐられたら、今度は本物を観に大学に足を運んでみませんか？

温故知新
Find new
wisdoms through
old things.
Volume
5

シーボルト 記念植物園

十九世紀の長崎から旅立っていった植物が、今またこの地に里帰り。薬用植物園の中で命をつむぎながら歴史を語っています。



シーボルト記念植物園 長崎大学附属薬用植物園内
平日は門を開放し、一般の出入りもできる薬用植物園。シーボルト記念植物園は門に入って右手エリア。ベンチもあります。春先には多くの花が咲き、季節によって楽しめます。県内の大学では唯一、大麻の原料となるケシの栽培もしており、法律により厳重に檻に囲われているのもちょっと珍しい光景です。
開園 平日8時半～17時半

